

Title	サハラ以南に関するアラビア語資料(1)
Author(s)	竹田, 新; 西尾, 哲夫
Citation	大阪外国語大学学報. 76(3) p.83-p.101
Issue Date	1988-11-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81213
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

サハラ以南に関するアラビア語資料(1)

竹 田 新
西 尾 哲 夫

Arabic external sources of East and West Africa (I)

Shin TAKEDA
Tetsuo NISHIO

Arabic materials have long been recognized to be indispensable sources for the historical study of East and West Africa (or, more appropriately, Africa to the south of the Sahara). In terms of their provenance, these Arabic sources can be classified into two kinds, one being written by indigenous African people, and the other being written by the other people, exclusively Arabs and Persians. The present authors in this paper will translate the latter kind of Arabic materials into Japanese, providing as detailed annotations as possible. We have two principal purposes. The first is to provide Arabic sources for “Africanists”, to whom Arabic literature is hardly accessible. The second, more importantly, is to examine both what the Arab-Islamic idea is toward Sub-Saharan Africa, and how the idea has developed, by taking full advantage of these materials as the sources for the history of the relationship between the Arab-Islamic world and Africa. To put it in general terms, we will try to examine in what way accumulated various kinds of “knowledge” concerning the other world (people, culture, etc.) are molded, through motivated reformation and reasoning, into the stereo-typed views both in the individual minds and in the society. Consequently, literary works (Adab) as well as geographical and historical materials will be discussed. (In what follows, we will translate al-Khuwarazmi’s Surat al-’ard, Ibn Qutayba’s Adab al-katib and Kitab al-ma’arif, Ibn ‘Abd al-Hakam’s Futuh misr, and al-Ya’qubi’s Ta’rikh.)

I

ヨーロッパの過去のアフリカ観に根ざした「歴史のない暗黒大陸アフリカ」という考え方は、根拠のないものである。さらに、その考え方の学問的反映として、アフリカ（特にサハラ以南のアフリカ）の歴史研究に際し、史料批判という基本的操作が十分に有効ではないとする態度もまた、正しいものではない。アフリカ史の歴史の資料としては口頭伝承や文字資料が重要であるが、中でも、ヨーロッパ側の史料がない十五世紀以前については、アラビア語資料が不可欠である。Lewicki (1969)によれば、そのようなアラビア語資料は、アフリカの現地人自身が書いた内的資料 (internal source) と、その他の人が書いた外的資料 (external source) に分けられるが、本稿で訳出する文献は基本的には後者に属する。同種の試みとしては、すでに、Koubbel & Matveev (1960-), Cuq (1975), Hopkins & Levtzion (1981) があるが、いずれも地理、歴史文献を中心に扱い、最初のものは、東西アフリカを、後者の二つは、西アフリカを対象としている。本稿では、サハラ以南に属するアフリカ全体を扱い、東アフリカ（の人々）を指すザンジュ (Zanj), 西アフリカから中央アフリカ（の人々）を指すスーダン (Sūdān) の二つの言葉をキーワードとして、その関連部分の訳出を試みる。なお、ベジャ、ベルベル、ハバシャ（エチオピア）については、所謂「ブラック・アフリカ」に属する地域でないということと、特に、エチオピアについてはキリスト教圏でもあり、ゲーズ語等による独自の文献が豊富にあるので、訳出の対象としない。また、以上のような地域に関するアラビア語資料は、アフリカ史の再構築に不可欠であるが、本稿では、アフリカ史研究者に同時代史料を単に提供するというやや消極的な目的のためだけでなく、より積極的に、アラブ・イスラム世界とアフリカ世界の交渉史料として、預言者ムハンマドによるイスラム教成立以降の爆発的なアラブ・イスラム世界の拡大に伴う他世界認識の変化を跡づけてみたい。従って、見聞などの直接情報を含む地理、歴史文献だけでなく、伝説や諺などのアラブ世界での「アフリカ観」に根ざした情報を含む、広い意味での文学（アダブ）作品をも資料として扱うことにする。

II

フワラズミー (al-Khūwārazmī) の名で呼ばれる Abū Ja'far Muḥammad b. Mūsā は、自身或いは先祖がアラル海の南のホラズム (Khūwārazm) 出身と思われるが、アッバース朝第七代カリフ al-Ma'mūn (在位813~83) の時代、バグダードの学術研究施設「知恵の館」に務め、マムーン図と称される世界地図の作成に参加した他、代数学書『ジャブルとカーバラの計算に関する要説』等を著し、847以降に没したとされる数学家、天文学家、地理家である。因みに、ヨーロッパでは、この代数学書を通じて、Algorithmi, Algorithmus というラテン語名で知られる。彼の地理書『大地の姿 (K. Ṣūrat al-'ard)』(836年以降?) は、赤道以北を七つの平行圏即ち気候帯 (iqḥīm) に分け、各気候帯（赤道以南と第七気候帯の北を加増）にある都市、山岳、河川の経緯度や、主な海洋と島

嶼の経緯度などを記したもので、現存していない本体たる地図に付けられた説明書と推察される。この書は、プトレマイオス (Claudius Ptolemaeus 168年頃没) の『地理学入門 (Geographice Hyphegesis)』に依拠したものだが、特にアフリカについてはそれが顕著で、殆どが二世紀当時の情報をそのまま載せている。

Abū Ja 'far Muḥammad b. Mūsā al-Khuwārazmi, *Ṣūrat al-'arḍ*, ed. Hans von Mzik, Vienna 1926⁽¹⁾ .

赤道の後ろにある町

	経度	緯度
海に面した Rāfāṭa ⁽²⁾	65°0'	8°0'
第一気候帯にある町		
Yārzithā の町 ⁽³⁾	10°0'	15°30'
Maghurā の町 ⁽⁴⁾	12°30'	15°0'
ザガーワ (Zaghāwa) ⁽⁵⁾	60°15'	11°0'
カウカウ (Kawkaw) ⁽⁶⁾	48°0'	10°15'
ガーナ (Ghāna) ⁽⁷⁾	44°30'	10°45'

第二気候帯にある町

Thamundūqanā の町 ⁽⁸⁾	23°30'	18°0'
Nighīrā の町 ⁽⁹⁾	25°30'	18°20' ⁽¹⁰⁾

赤道の後ろにある山

	始めの境界		終わりの境界		色	峰の方向
	経度	緯度	経度	緯度		
Dawkhīs 山 ⁽¹¹⁾	8°30'	0°50'	13°30'	4°0'	黄	南
Yānaqlūs 山 ⁽¹²⁾	13°45'	10°35'	18°40'	6°30'	瑠璃色	北
Ḥasafāris 山 ⁽¹²⁾	25°0'	10°25'	28°45'	7°20'	赤	北
'Inīsqī 山 ⁽¹³⁾	24°40'	14°20'	30°0'	11°10'	瑠璃色	南
'Āliha 山 ⁽¹⁴⁾ この山の一部は第一気候帯に、また一部は赤道の後ろにある	32°10'	9°25'	32°30'	2°45'	赤	西
Bārdīṭūn 山 ⁽¹⁵⁾	37°0'	6°0'	42°0'	6°0'	黄	南
月の山 ⁽¹⁶⁾ エジプト (Miṣr) のナイル (Nīl) 川はここから流れ出る	46°30'	11°30'	61°50'	11°30'	赤	南
始まりが赤道の後ろに、終わりが第一気候帯にある山 ⁽¹⁷⁾	46°50'	9°50'	51°0'	23°45'	鉄色	西
al-Filiyā 山 ⁽¹⁸⁾	58°0'	0°0'	60°10'	3°25'	鉄色	南
第一気候帯にある山						
Qāfas 山 ⁽¹⁹⁾	27°00'	8°0'	27°0'	12°40'	赤	西

Thalā 山 ⁽²⁰⁾	38°30′	11°0′	38°40′	7°15′	黄	西
'Aruwalṭis 山 ⁽²¹⁾	38°45′	3°20′	44°0′	3°20′	バラ色	南
ガーナの山, 下 Gharamas 山 ⁽²²⁾	43°50′	8°50′	44°35′	12°45′	瑠璃色	西
第二気候帯にある山						
(無名の) 山 ⁽²³⁾	15°0′	16°20′	15°0′	24°0′	瑠璃色	東
(無名の) 山 ⁽²³⁾	24°0′	20°0′	24°10′	23°0′	バラ色	西
(無名の) 山 ⁽²³⁾	27°0′	20°0′	27°0′	23°0′	黄	西
Sarghātūs 山 ⁽²⁴⁾	29°0′	20°0′	33°30′	20°0′	瑠璃色	北
Jirjiris 山 ⁽²⁵⁾	39°10′	21°0′	43°30′	21°0′	青色	南 ⁽²⁶⁾

西の外海⁽²⁷⁾ ……

その始まりは経度1°0′・緯度0°10′からで、経度20°0′・緯度0°10′まで至ると、短外套 (ṭaylasān)⁽²⁸⁾ の形に経度17°0′・緯度8°0′まで進み、経度9°0′・緯度8°30′を通り、丸口 (quwāra) の形に経度7°0′・緯度12°30′まで至る。次で経度9°45′・緯度12°20′まで至り、更に経度9°45′・緯度16°0′へと進み、経度10°0′・緯度16°0′を通過して、経度10°0′・緯度17°0′まで至る。次でシャブーラ (shābūra)⁽²⁹⁾ の形に経度9°20′・緯度18°10′まで至ると、そこには Nūwīyūs 川⁽³⁰⁾ の河口がある。海は経度9°50′・緯度19°40′へと進み、シャブーラに似た形に経度9°15′・緯度21°0′まで戻り、経度9°45′まで至るが、そこには Khūsayrus 川⁽³¹⁾ の河口があり、緯度は21°45′である。海は経度9°10′・緯度23°0′へと進み……⁽³²⁾

……緑の海⁽³³⁾

……丸口の形に at-Ṭib の町⁽³⁴⁾ の下手付近及び Qanānā の町⁽³⁵⁾ の下手の隣接部付近を経度72°30′・緯度2°20′において通り、経度66°20′・緯度0°20′s へと至り、経度68°40′・緯度3°30′s を通り、Rafāṭa の町の下手、経度65°0′緯度7°30′s まで進み、経度68°0′・緯度13°0′s に至る。……海は更に経度72°0′・緯度14°0′s まで進み、経度112°0′・緯度14°0′s まで至り……⁽³⁶⁾ ……

諸国の境界が書かれている場所

内エチオピア ('Aythīfiya ad-dākhila)⁽³⁷⁾ の地⁽³⁸⁾ は、図上での中心が経度26°0′・緯度5°30′s にある。

ガーナは、'Aghramantīs と呼ばれる人々⁽³⁹⁾ のことであり、図上での中心が経度41°0′・緯度20°30′にある。

雨のない ad-Damlī の地⁽⁴⁰⁾ は、図上での中心が経度44°30′・緯度5°0′にある。

内リビア (Libū'ayī ad-dākhila)⁽⁴¹⁾ の地⁽⁴²⁾ は、図上での中心が経度20°0′・緯度21°30′にある。

赤道の後ろにある水源の名称

或る水源の [の川]⁽⁴³⁾ が赤道の後ろ、経度30°30′・緯度5°0′s で、'Āliha 山から流れ出て、経度27°0′・緯度3°30′s まで進み、そのあと第一気候帯の経度19°0′・緯度6°10′で海に至る。

エジプトのナイル川とそれに流れ込む諸水源・河川。丸い湖が二つあり、各々の直径は5°で、第

一のものの中心は経度50°0′・緯度7°0′sに、第二のものの中心は経度57°0′・緯度7°0′sにある。第一のものに月の山から五つの川が注ぎ込むが、一番目の川の始まりは経度48°0′にあり、二番目の〔川の始まり〕は経度49°0′に、三番目の〔川の始まり〕は経度50°0′、四番目の〔川の始まり〕は経度51°0′に、五番目の〔川の始まり〕は経度52°0′にある。月の山からは第二の湖へも五つの川が流れ出ており、一番目の川の始まりは経度55°20′、二番目の〔川の始まり〕は〔経度〕56°20′、三番目の〔川の始まり〕は〔経度〕57°20′、四番目の〔川の始まり〕は〔経度〕58°20′、五番目の〔川の始まり〕は〔経度〕59°20′にある。これら二つの湖の各々から四つの川が第一気候帯にある丸い湖に流れ出るが、この湖の直径は2°で、中心は経度58°30′・緯度が第一気候帯の2°0′にある。第一の湖から出る一番目の川の始まりは経度48°40′、二番目の〔川の始まり〕は経度49°30′、三番目の〔川の始まり〕は経度51°15′にあり、二番目と三番目〔の川〕は経度52°0′・緯度が赤道の後ろの1°0′で合流し、そのあと先に述べた湖へ一つの川となって進む。また四番目の川〔の始まり〕は経度52°0′にある。第二の湖からその小さな〔湖〕へ流れ来る一番目の川は、始まりが経度55°30′に、二番目の〔川の始まり〕は経度56°20′、三番目の〔川の始まり〕は経度58°0′にあり、二番目と三番目〔川〕は経度56°0′・緯度が赤道の後ろの1°0′で合流し、そのあと先に述べた湖に一つの川となって進む。そして四番目の〔川の始まり〕は経度59°0′にある。これら全ての川は小さい湖に至るが、各々の河口は互いに接していない。そのあとこの小さな湖から或る大きな川、即ちエジプトのナイル川が流れ出る。それはスーダーン⁽⁴³⁾と‘Alwa⁽⁴⁴⁾とザガーワとフェッザーン (Fazzān)⁽⁴⁵⁾とヌビア (an-Nūba)⁽⁴⁶⁾を通り……

第一気候帯とそこにある水源・河川

或る水源がQāfas山にあり、そこからDaraṭūs川⁽⁴⁷⁾が流れ出て海に注ぐ。その川の始まりは経度26°30′・緯度11°0′に、終わりは経度10°20′・緯度14°0′にある。或る水源はThalā山にあり、そこから或る川⁽⁴⁸⁾が流れ出て、Daraṭūs川に注ぐ。その始まりは経度37°30′・緯度9°40′にあり、そこから経度28°0′・緯度17°30′へ進み、それからṬhamundūqanāの町の方へ少し曲がって経度21°45′・緯度17°0′を通り、更に進んで経度17°0′・緯度12°30′でDaraṭūs川に注ぐ。或る水源が第二気候帯にあり、そこから或る川⁽⁴⁸⁾が流れ出て、この(=Daraṭūs)川に注ぐ。その始まりは経度34°30′・緯度17°20′に、その注ぎ口は経度28°0′・緯度17°20′にある。或る水源〔の川〕⁽⁴⁹⁾がやはり一番目の川に流れ込む。その始まりはSarghātūs山中、経度29°30′・緯度20°0′にあり、或る小さな湖へ進む。そ(=湖)の中心は経度28°0′・緯度18°30′にある。それ(=川)は流れて、先に述べた川に経度27°30′・緯度17°30′で流れ込む。或る水源が或る山にあり、〔その川〕⁽⁵⁰⁾はやはり一番目の川に注ぐ。その水源〔の川〕の始まりは経度24°0′・緯度20°30′に、その川への注ぎ口は経度26°20′・緯度18°20′にあり、Nighīrāの町を通る。或る水源〔の川〕⁽⁵¹⁾がやはり一番目の川に注ぐ。始まりは経度17°0′・緯度19°30′に、その川への注ぎ口は経度21°40′・緯度17°0′にある。

或る水源〔の川〕⁽⁵²⁾がガーナの山から流れ出ており、注ぎ口は海にある。始まりは経度44°30′・緯度11°40′にあり、経度39°30′・緯度16°40′へ進み、そのあと大Jarmiの町⁽⁵³⁾を通過して、Sarghātūs山まで至り……この川には亀の湖 (Buḥayrāt as-Salāḥif) と呼ばれる二つの水源⁽⁵⁴⁾から或る川が流れ

込む。一方は経度45°0'・緯度22°20'に、もう一方は経度46°20'・緯度22°0'にあり、各々から或る川が流れ出ており、両者は経度45°30'・緯度21°0'で出会い、一つの川となって、経度39°40'・緯度16°40'で一番目〔の川〕に注ぐ。⁽⁵⁵⁾

第二気候帯とそこにある水源・河川

Nūwīyūs 川は或る山から流れ出ており、その始まりは経度15°0'・緯度18°20'に、海への注ぎ口は経度9°20'・緯度18°20'にある。Fayādis 川⁽⁵⁶⁾、つまり蛇川は或る山から流れ出ており、その始まりは経度15°0'・緯度20°25'に、海への注ぎ口は経度9°40'・緯度20°25'にある。

Khūsayrus 川は経度15°0'・緯度21°45'で、或る山から流れ出ており、海への注ぎ口は経度9°45'・緯度21°45'にある。Salathūs 川⁽⁵⁷⁾は経度15°0'・緯度22°25'で、或る山から流れ出ており、海への注ぎ口は経度9°0'・緯度23°45'にある。或る川⁽⁵⁸⁾が経度23°10'・緯度22°30'で、或る山⁽⁵⁹⁾から流れ出ており、海への注ぎ口は経度9°0'・緯度25°40'にある。或る川⁽⁶⁰⁾が Jirjiris 山から流れ出ており、その始まりは経度39°20'・緯度21°0'にあり……或る川⁽⁶¹⁾がやはり Jirjiris 山から流れ出ており、注ぎ口はこの川にある。始まりは経度41°45'・緯度21°0'に、その川への注ぎ口は経度40°0'・緯度24°0'にある。或る水源が経度41°30'・緯度16°30'にあり、そこから或る川⁽⁶²⁾が流れ出て、経度44°0'・緯度14°40'で Nūbā 湖⁽⁶³⁾まで至る。その湖は1/2の大きさである。⁽⁶⁴⁾

III

'Abū Muḥammad 'Abd 'Allāh b. Muslim ad-Dīnawarī, つまりイブン・クタイバ (Ibn Qutayba) は 213/828年クーファで生まれ、276/889年バグダードで没した。彼の一族については不明な点が多いが、ホラサーン出身のイラン系であったらしい。彼の経歴についても不明な点が多い。スンニー派であったために、カリフ al-Mutawakkil による Mu'tazila 派の肅正以後頭角を現わし、時の宰相によって、重用された。神学論争にも加わり、イスラムの伝承を弁護した。236/851年に Dīnawar の法官に任命され、256/870年頃、バスラに來たが、ザンジュの乱のためバグダードに赴いた。以後生涯を通じて、同地で執筆、教育活動に従事した。(G. Lecomte 'Ibn Kutayba' EI² III pp.844~47参照)。

彼は多作であり、ハディース学者、法学者、文法学者として広範囲にわたる著作を残している。「'Adab al-kātib (書記の教養)」は、その名の通り、書記として知っておくべき教養を記したもので、初期アダブ文学の代表的著作とされる。著作年は確定できないが、Lecomte (ibid.) によれば、彼が政府に重用されるよりも以前の作品と推定される。内容については、バグダード学派と称される、クーファ学派とバスラ学派の中間的立場をとる文法学を推進した彼らしく、大半は、文法的記述が中心となるが、天文学、数学、歴史学等、様々な分野の教養的知識がまとめられている。⁽¹⁾

'Abū Muḥammad 'Abd 'Allāh b. Muslim Ibn Qutayba ad-Dīnawarī, 'Adab al-kātib, ed. Max Grünert, Leiden 1900⁽²⁾

人間の肉体上の欠陥についての知識の章…… laṭa'⁽³⁾ とは、唇の中に見られ、唇にできる白いもので

ある。それはよくスーダーン人に生じる。また、bujra⁽⁴⁾ も彼らに生じるが、それは臍が出ることである。⁽⁵⁾

IV

'Abū al-Qāsim 'Abd ar-Raḥmān b. 'Abd 'Allāh, つまり Ibn 'Abd al-Hakam は182/798—799年（または187/803?）にエジプトで生まれ、257/871年に同地で没した。彼の一族は祖父以来、マーリキー派の法学者として著名であったが、227/842年の Mu'tazila 派の miḥna による迫害、さらに237/851年に公金横領の事件に連座し、その後免責されたが、没落していった（F. Rosenthal 'Ibn 'Abd al-Hakam' EI² III pp.674—75. Torrey の序文を参照）。その著書「エジプトとマグリブ征服史」は、初期のムスリムの征服活動を知る情報源である。全体は三部に分かれ、伝説を含む初期の時代から 'Amr b. 'Ās の死までの年代記的記述、さらに続く北アフリカの征服活動を扱った部分と、246/860年までのエジプトの判官史の部分、エジプトにきた預言者の側近たちが伝えたハディースを扱った部分に分かれる。彼の記述は、歴史家というより、法学家、或いは伝承学者としての色彩が強く、個々の事件の整合性より、伝承経路の確定に重きがおかれている。また、Brunschvig (Ibn 'Abd al-Hakam et la conquête de l' Afrique du nord par les Arabes, AIEO 6, pp.108—55. 1942—47), 森本（『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』pp. 3—22, 岩波書店, 1975）等の研究によれば、征服活動の記述については、彼の法学家としての態度によるものと考えられるが、ムスリムの征服活動に法的正当性を付加しようとするあまり、事実通りではなく、ムスリム側に有利な記述が多々見られる。

'Abd ar-Raḥmān b. 'Abd 'Allāh Ibn 'Abd al-Hakam, Futūḥ Miṣr, ed. Charles C. Torrey, *The History of the Conquest of Egypt, North Africa and Spain known as the Futūḥ Miṣr of Ibn 'Abd al-Hakam*, New Haven 1922⁽¹⁾

……ハム (Ḥām) の長子はカナーン (Kan'ān b. Ḥām) であり、⁽²⁾ 彼は方舟の中で [神の] 懲罰の結果身籠もった児であった。ノア (Nūḥ) は彼に呪いをかけ、⁽³⁾ 彼は黒人として生まれでたのだが、彼の子孫には粗野で怠惰で暴虐なところがある。彼はスーダーンとハバシャ (al-Habash) の全ての人々の父である。彼の第二の子はクシュ (Kūṣh b. Ḥām) で、彼はシンド (as-Sind) とインド (al-Hind) の人々の父である。第三の子はプテ (Fūṭ b. Ḥām) で、彼はベルベル人 (al-Barbar) の父である。四番めの末子は、バイサル (Bayṣar b. Ḥām)⁽⁴⁾ で、彼はコプト人 (al-Qibṭ) 全員の父である。

……預言者ノアは、セム (Sām), ハム, ヤペテ (Yafith) の三人の子供をもうけた。この三人は各々全てが三人ずつ子をもうけた。……ハムはスーダーン人、ベルベル人、コプト人の父である。⁽⁵⁾

ヌビア事情

それから 'Abd 'Allāh b. Sa'd⁽⁶⁾ は、黒人達 (al-'asāwid)⁽⁷⁾ , つまりヌビアを31年 (A.H.) 襲撃した。これは、Yahyā b. 'Abd 'Allāh b. Bukayr⁽⁸⁾ が私達に伝えた通りである。⁽⁹⁾ ……それから、その後す

ぐに彼(= 'Uqba b. Nāfi' al-Fihri)⁽¹⁰⁾ は、フェッザーン (Fazzān)⁽¹¹⁾ の城の方向に進み、次々にそれからの城を征服し、ついに最遠の城まで至った。そこで、彼は彼らに「お前たちの向こうに誰か居るのか。」とたずねた。彼らは言った。「はい、khāwār⁽¹²⁾ の人々がいます。そこは、砂漠のはての険しい地形の山頂にある大きな城で [カワール (kawār)⁽¹³⁾ の] 主都であります。彼は十五夜かけてそこへ進み、到着すると、彼らは砦で防備をしていた。そこで彼は一ヵ月間彼らを包囲したが、どうすることもできなかった。それで、その城の前を通過して [別の] カワールの諸城に行き、それらを征圧し、ついに王が住む最遠の城に到着した。彼は彼(=王)をとらえて、その指を切ってしまった。その王が、「なぜ、あなたは私にこういうことをしたのですか。」と言うと、彼は、「お前へのいましめなのだ。もし、お前が指をみれば、決してアラブ人と戦おうとはしないだろう。」と述べて、彼に三百六十人の奴隷を課した。⁽¹⁴⁾ それから、彼は彼らに「お前たちの向こうに誰か居るのか。」とたずねると、案内人は、「私にはそれについて、知識がありませんし、お教えすることはありません。」と言った。それで、ウクバはそこを去って、帰路についた。khāwār の城のそばを通ったが、介入したり、滞在したりせず、三日間進行した。それで人々は安心して町を開放した。ウクバは、今日の Mā' Faras (馬の水)⁽¹⁵⁾ という名前の場所で投宿した。しかし、当時そこに水はなかったので、ウクバと彼の従者たちは、激しいのどの渇きにおそわれ、瀕死の状態になった。それで、ニラクア⁽¹⁶⁾ の礼拝をし、アッラーに祈願した。すると、ウクバの馬がその二本の前脚で地面をさぐりはじめ、やがて一個の石を蹴散らすと、そこから水が噴出した。そして、その馬はその水をすすりはじめた。ウクバはそれを見てとって、人を呼んで掘れと命じた。彼らは水をふくむ砂地を七十ヵ所掘って、水を飲み、渇きをいやした。そのために、そこは Mā' Faras と名付けられた。それから、ウクバは進んで来た道とは別の道を通して khāwār に戻った。人々が彼に気付かないまま、彼は夜の内に彼らのところへやってきた。彼らが安心して、すでに地下の住居で休んでいるのがわかったと、彼は、その町にいる彼らの子供や財産を掠奪し、戦士を殺した。それから、彼はそこを去り、帰路についた。彼は進み、ついに今日のザウィーラ (Zawīla)⁽¹⁷⁾ の地で投宿した。⁽¹⁸⁾

……'Ubayd 'Allāh⁽¹⁹⁾ は、Ḥabīb b. 'Abī 'Ubayda al-Fihri⁽²⁰⁾ に、スース (as-Sūs)⁽²¹⁾ と、スーダーンの地 ('arḍ as-Sūdān) を襲撃させた。彼は、それらの地で例を見ないほどの大成功をおさめ、望むだけの金を獲得した。彼が獲得したものの中には、ベルベル人がイッジャー⁽²²⁾ ('ijjān) と呼ぶ種族の一人もしくは二人の女奴隷が含まれていた。そして、彼女たち二人のどちらにも乳房が一つしかなかった。⁽²³⁾ ……

V

ヤアクービー (al-Ya'qūbī) の名で知られる 'Abu 'l-'Abbās 'Aḥmad b. Ishāq b. Ja'far b. Waḥb b. Waḍiḥ は、839年頃バグダードに生まれた。高祖父 Wāḍiḥ は、アッバース朝カリフ al-Manṣūr (在位754~75年) と al-Mahdī (在位775~85年) のマウラー (非アラブ人・被護民) として、アルメニ

アとアゼルバイジャンの総督やエジプトの総督などを歴任した人物で、彼以後も代々、カリフに仕えていたらしい。ヤアクービーは青年期をアルメニアやターヒル朝下のホラーサーン（イラン北東部）で送り、ターヒル朝滅亡（873年）後は、インド、アラビア、シリアを経て、マグリブ（北アフリカ）まで旅をし、結局はエジプトに落ち着き、897（或いは907）年に没するまで、トゥールーン朝の庇護下にあった。シーア派十二イマーム派の一つ *Mūsawīya* を信奉し、書記などを職業としていたようで、『年代記（*Ta' rīkh*）』、『国々の書（*K. al-Buldān*）』など、五点の歴史・地理書を著している。

『年代記』（872～3年）は、二部からなる。第一部は、アダム以下代々のイスラエル民族の長の伝記及びキリストと使徒たちの物語りに続き、メソポタミア、インド、ギリシア、ローマ、ペルシア、北方、中国、エジプトの王たちとアフリカの諸王国について記述し、最後にイスラム以前のアラブの状況を説明する。第二部は、ほぼ二倍の長さを持ち、神の使徒（ムハンマド）の誕生に始まり、アッバース朝カリフ *al-Mu'tamid* の治世の259 A.H./872～3年に終わるイスラム史であるが、シーア派歴代の各イマームについては、独立の章を設けて記述しており、シーア派的傾向の強い世界史である。ターヒル朝の宮廷で書かれたようだが、はるか西方のスーダーンに関して豊かな、しかもかなり正確な情報を提供してくれる。

'Aḥmad b. 'Abī Ya'qūb b. Ja'far b. Wahb b. Wāḍih (al-Ya'qūbī), *Ta' rīkh*, ed. M. Th. Houtsma, *Ibn Wadhih qui dicitur al-Ja'qubi Historiae*, Leiden 1883⁽¹⁾

ある日、ノアが眠っていると、彼の服がはだけてしまった。彼の息子ハムは彼（＝ノア）の陰部を見て笑い、そのことは、兄弟のセムとヤベテにも知らされた。すると彼ら二人は服を取り、顔をそむけながら彼（＝ノア）のもとへそれを持って来た。そして、二人はその服を彼の上に投げた。ノアは眠りから目覚め、ことの次第を知ると、ハムの息子のカナーンに呪いをかけたが、ハムには呪いをかけなかった。⁽²⁾ 彼（＝ハム）の子孫にはコプト人、ハバシャ人、インド人がいる。カナーンはノアの子孫のうちで、カイン（*Qābīl*）の子らの行為に立ち返った最初の者であり、遊びや歌、フルート（*mizmār*）、太鼓（*ṭabl*）、ギター（*barbat*）、シンバル（*ṣanj*）に興じ、悪魔（*shayṭān*）に従って、遊樂に耽り、時を無駄に過ごした。ノアは大地を彼の子供たちの間で分けた。……ハムには、西方（*al-maghrib*）の地と海岸部（*as-sawāḥil*）⁽³⁾を与えた。ハムの息子のクシュとカナーンの両子孫にはヌビア人、ザンジュ人⁽⁴⁾、ハバシャ人がいる。……⁽⁵⁾

ハバシャ人とスーダーン人の王国

ノアの子孫たちが、バビロン（*Bābil*）の地から離散した時、ノアの子ハムの子孫たちは西方を目指した。そしてユーフラテス（*al-Furāt*）を渡り、太陽の沈む地へと進む⁽⁶⁾が、ハムの子クシュの子孫たち、つまりハバシャ人⁽⁷⁾とスーダーン人はエジプトのナイルを渡った時、二つの集団に分かれた。一方の集団は南の、東方と西方の間を目指した。ヌビア人、ベジャ人（*al-Buja*）⁽⁸⁾、ハバシャ人、ザンジュ人である。もう一方の集団は西を目指した。ザガーワ人、*al-Ḥ.b.s.* *al-Qāqū*, *al-Marawīyūn*⁽¹¹⁾, *Maranda*,⁽¹²⁾ カウカウ人、ガーナ人である。⁽¹³⁾

……最後に挙げるハバシャ人の王国は、ザンジュ人 [の王国] である。シンドや、これらの国に近い (=近隣の) 地域と接し、ザンジュ人 [の王国] 以外でシンドや al-K.rk⁽¹⁴⁾ と隣り合う地域とも接している。⁽¹⁵⁾ 彼ら (=ザンジュ人) は、物事をよく計算し、団結心の強い人々である。一方、西へ向かい、マグリブへ進んだスーダーン人は、国を横切り、多くの王国を持つようになった。彼らの最初⁽¹⁶⁾ に挙げる王国はザガーワ人 [の王国] で、彼ら (=ザガーワ人) はカーネム (Kānim)⁽¹⁷⁾ と呼ばれる場所に居住している。住居は葦 (qaṣab) の掘立て小屋で、町というものがない。王は Kāk.r.h⁽¹⁸⁾ と呼ばれている。ザガーワ人の中には al-H.w.d.y.n.⁽¹⁹⁾ と呼ばれる集団があり、ザガーワ人出身の王を有する。次に、Mallal⁽²⁰⁾ と呼ばれる [人々の] 王国があり、カーネムの王と敵対している。王は M.y.w.s.y⁽²¹⁾ と呼ばれている。次に、al-H.b.ṣha [人]⁽²²⁾ の王国がある。彼らは Th.b.y.r.⁽²³⁾ と呼ばれる町を有し、この町の王は M.r.ḥ⁽²⁴⁾ と呼ばれている。彼らに接して al-Qāqū [人] がいるが、独立しておらず、王は Th.b.y.r. の王である。次に、カウカウの王国がある。スーダーン人の王国の中で最も大きく、最も強大かつ重要で、全ての王国がその王に服従する。カウカウはその町の名前である。この他にも [支配者が] 自国の王でありながら、彼 (=カウカウの王) に服従し、宗主権を認める王国が多数ある。その中には al-M.r.w⁽²⁵⁾ 王国がある。広大な王国で、王は al-Ḥ.yā⁽²⁶⁾ と呼ばれる町を有する。また、M.r.d.n.h⁽²⁷⁾ 王国、al-H.r.b.r⁽²⁸⁾ 王国、Ṣanhāja⁽²⁹⁾ 王国、T.dh.k.r.y.r⁽³⁰⁾ 王国、az-Z.yān.y.r⁽³¹⁾ 王国、'r.w.r⁽³²⁾ 王国、B.qār.w.t⁽³³⁾ 王国もある。これらは全てカウカウ王国に従属している。次に、ガーナ王国がある。その王もやはり有力で、彼の国には幾つかの金山がある。また彼の支配下には王が多数おり、'Ām⁽³⁴⁾ 王国、Sāma⁽³⁵⁾ 王国が含まれている。この国は全土に金がある。⁽³⁶⁾

VI

「Kitāb al-ma'arīf (知識の書)」は書記必携の百科全書とでもいうべきもので、266/879-80年頃には書き終わっていたらしい。内容は、イスラム以前からの歴史を教養書として記したものである。

'Abū Muḥammad 'Abd 'Allāh b. Muslim Ibn Qutayba ad-Dīnawarī, *Kitāb al-ma'arīf*, ed. Th. 'Ak āṣha, Cairo 1960⁽¹⁾

ワフブ・ブン・ムナッビフ⁽²⁾ が言うには、ノアの子ハムは容姿端麗な白人であった。神(アッラー)は彼の父の呪いの言葉により彼の [皮膚の] 色と彼の子孫達の [皮膚の] 色を変えた。⁽³⁾ 彼 (=ハム) は立ち去り、彼にその子等も従った。そして、海岸 (sāhil al-baḥr) に落ち着いた。神は彼らを増し栄えさせた。彼らが、スーダーン人なのである。彼らの食物は魚である。彼らは自分達の歯を針のようになるまで、鋭くした。というのは、いつも魚が歯にくっついたからである。彼の子等の一部は西方 (al-maghrib) に住み着いた。ハムの子供には、クシュ (Kūsh b. Ḥām) とカナーン (Kan'ān b. Ḥām) とプテ (Fūṭ b. Ḥām) がいた。プテは旅をし、インドとシンドの地に落ち着いた。それゆえ、かの地の人々は彼の子孫である。クシュとカナーンについて言えば、スーダーン人種、つまりヌビ

ア、ザンジュ、カラーン (al-Qarān)⁽⁴⁾、ザガーワ、ハバシャ、コプト、ベルベルは、彼らの子孫である。⁽⁵⁾

……Ibn Dhī Yazan⁽⁶⁾ が彼 (= Kisrā 'Anūshirwān b. Qabāz)⁽⁷⁾ のもとへやって来て、ハバシャ人に対して彼を助けてくれるよう求めた。⁽⁸⁾ そこで彼は彼の將軍たちのうちからワフリズ (Wahriz) と呼ばれるひとりの將軍をダイラム (Daylam) 人⁽⁹⁾ からなる軍隊とともに派遣した。彼らはイエメンを征服し、スーダーン人⁽¹⁰⁾ を追放し、そこにとどまった。⁽¹¹⁾ ……

[翻訳担当箇所：al-Khuwārazmī, al-Ya' qūbī の部分を竹田が、Ibn Qutayba, Ibn 'Abd al-Hakam の部分を西尾が、それぞれ担当した。]

本稿では原則として資料の著作年代の順に翻訳を試みる。当該資料の著作年代が確定できない場合は、その著者の没年を基準にする。なお、本稿で使用する略号は以下の通りである。

AHA: T.Lewicki, *Arabic External Sources for the History of Africa*, Warsaw 1969.

CHA: *Cambridge History of Africa*.

Corpus: J.F.P.Hopkins & N.Levtzion, *Corpus of early Arabic sources for West African history*, Cambridge 1981.

Die Benin-Sammlung: J.Marquart, *Die Benin-Sammlung des Reichsmuseums für Völkerkunde in Leiden*, Leiden 1913.

EI: Encyclopaedia of Islam (EI¹ は旧版, EI² は新版)

History: J.S.Trimingham, *A History of Islam in West Africa*, Oxford 1962.

Arab. istochniki: Л.Е. Куббел и В.В. Матвеев, *Арабские источники VII—X веков по этнографии и истории африки южнее сахары*, Москва, 1960.

JAH: *Journal of African History*

Recueil: J.M.Cuoq, *Recueil des sources arabes concernant l' Afrique occidentale du 8e au 16e siècle*, Paris 1975. (本稿では同書のもととなった博士論文の方を利用した。)

Tableau: R.Mauny, *Tableau géographique de l'ouest africain au moyen âge*, Dakar 1961.

註

II

(1) 研究書には Nallino, C. A.: *Al-Huwārizmī e il suo rifacimento della Geografia di Tolomeo*, Rome, 1894. Mzik Hans von: *Afrika nach der arabischen Bearbeitung der Γεωγραφικὴ ὑψηροσύνη des Claudius Ptolemaeus von Muhammad ibn Musa al-Hwarizmi*, Wien, 1916. 高橋正「アル・クワリーズミー図説(概報)」『地理学史研究Ⅱ』柳原書店, 1962, pp. 5—52がある。本書に登場するアフリカは Ptolemaeus 系統のものが大半を占め、それらは殆ど比定が困難なため、Ptolemaeus の『地理学入門』(ed. c. Müller & C. Th. Fischer, Paris, 1883, 1901. 以下, Ptolem. と略記) が“内 Αἰθνη (北アフリカ内陸部)”及びその下にある。“内

- “*Αιθιοπία*”としているものをすべて取り上げることにする。それ故、Ibn Qutayba 以降で取り扱う範囲より少々広い。
- (2) Ptolem. IV 卷 7 章 4 節及び 1 卷 17 章 5 節に、*Ραπτος* 河河口（経度 $72^{\circ}30'$ ・緯度 $7^{\circ}s$ ）海から少々離れた *Βαρβαρία* の首邑 *Ραπτα* ($71^{\circ} \cdot 7^{\circ}s$)、*Ραπτον* 岬 ($73^{\circ}50' \cdot 8^{\circ}25's$) が挙がっている。既に西暦 40～70 年頃に書かれた『エリュトラー海案内記』（村川堅太郎訳、生活社、1946。以下、案内記と略記）16 節と 18 節に、*Αζαμία* 地方最南の商業地として *Ραπτα* が登場しており、村川氏によれば、現タンザニアの海岸部の Bagamoyo $6^{\circ}31's$ から Kilwa $8^{\circ}57's$ 辺の間のどこかに比定されうる（p.150）。
- (3) Ptolem. IV 卷 6 章 2 節、内 *Αιβη* の *Ιαρχεῖθα* の町 ($10^{\circ} \cdot 15^{\circ}30'$) のこと。
- (4) Ptolem. IV 卷 6 章 7 節、内 *Αιβη* の *Μαγουρα* ($12^{\circ}30' \cdot 15^{\circ}$) のこと。
- (5) 狭義には現チャドの Ouadaï 地方及びスーダンの Darfur 地方に居住するナイル・サハラ語族系の言語を話す民、自称 Beri であるが、Teda（或は Tebu）・Daza, Kanuri-Kanembu も含むいわゆる Sahara 諸語を話す東サハラの黒人遊牧民の総称として使われることが多く（cf. T. Lewicki: *Études maghrébines et soudanaises II*, Warszawa, 1983, pp.71–74）、ここでも後者の住む地域を指すと思われる。
- (6) ニジェール川中流の大湾曲部にあった Songhay 人の国及びその首邑 Kukiya (Goungula) のこと。のちにはその北にできた新都 Gao を指す。Kukiya は現マリ・ニジェール国境 Labezanga 瀑布の北にあったと言われる（C.H.A. II, p.677）。後述する Ibn Qutayba の K. al-Ma'arif によれば、既に Wahb b. Munabbih（728 年或は 732 年没）が Zaghawa に言及している。本稿 p.93 を見よ。
- (7) ニジェール川上流の北西に広がり、金の交易で栄えた、Mandingo 系 Soninke 人が主体の国及びその首邑のこと。首邑は R. Mauny によれば、現マリの首都バマコの北方 205 マイルにある Koumbi Saleh の遺址（Tableau pp.72–74）。次世紀の al-Mas'ūdī の地歴書 K. Muruj adh-Dhahab『黄金の牧場』によれば、al-Fazārī（9 世紀前半活躍）もこの Ghāna に言及している。ところで、al-Khūwārazmī は後述の通り、Ghāna を現リビア南西部 Fezzan 地方を本拠とする Gharamantes 人の地と考えていたようだ。これは 4 世紀頃、北方から鉄製の武器を持ち、馬に乗って Soninke 人の間に移り住んだと言われるベルベル人の一群（山口昌男『世界の歴史』6 講談社、1977, p.31）を Gharamantes 人と考えてのことであろうか。
- (8) Ptolem. IV 卷 6 章 10 節、*Νιγεις* 川の南にある *Θαμονδοκανα* ($23^{\circ} \cdot 17^{\circ}$) のこと。J. M. Cuoq は、al-Idrisī（1154 年没）の地理書に登場し、セネガル川の北とモロッコ南部の間にあって、昔栄えたとなっている Qamnūri の町としている（Recueil, p.147）なお、*Νιγεις* 川をニジェール川に比定する試みもあるらしい。
- (9) Ptolem. IV 卷 6 章 9 節、*Νιγεις* 川の北岸にある *Νιγεις* 首邑 ($25^{\circ}40' \cdot 17^{\circ}40'$) のこと。
- (10) 以上、pp. 3–8
- (11) Ptolem. IV 卷 8 章 3 節、*Δαυχισ* 山（中心 $15^{\circ} \cdot 13^{\circ}s$ ）のこと。
- (12) 以下 2 つは共に不明。
- (13) Ptolem. IV 卷 8 章 3 節、*Μεσχη* 山（中心 $25^{\circ} \cdot 13^{\circ}s$ ）のことか。
- (14) ‘*aliha* とは神々を意味し、Ptolem. IV 卷 6 章 3 節、神々の戦車（*Θεων Οχημα*）山脈（中心 $19^{\circ} \cdot 5^{\circ}$ ）のことだろう。Plinius（79 年没）の博物誌（VI, 35）や Hanno（前 5 世紀）の周航記（X VI 章）に「神々の戦車」が既に登場しており、Hanno の記述に従い、Cameroon 火山説や、ギニアの首都コナクリの背後の Kakoulima 山説などがあるようだが、Ptolemaeus のものは符合しない（織田武雄『古代地理学史の研究』柳原書店、1957, pp.380–81, 386）
- (15) Ptolem. IV 卷 8 章 3 節、*Βαρδητον* 山（中心 $45^{\circ} \cdot 6^{\circ}s$ ）のこと。
- (16) Ptolem. IV 卷 8 章 2 節、月の山脈（両端 $57^{\circ} \cdot 12^{\circ}30's$ 及び $67^{\circ} \cdot 12^{\circ}30's$ ）に当たる。実在しない山脈であるが、ナイルの水源の一つとされる、現ザイル・ウガンダ国境の Ruwenzori 山地などは確かに万年雪を戴き、白く輝く月を連想させうる。そしてナイルの水源を月の山脈と考える説は、以後のアラビア語地理書にもほぼ共通して見られる。註 46 も参照。
- (17) 不明。
- (18) Ptolem. IV 卷 7 章 9 節、*Πυλαία* 山脈（中心 $65^{\circ} \cdot 0^{\circ}$ ）のこと。
- (19) Ptolem. IV 卷 6 章 3 節、*Καφας* 山脈（中心 $17^{\circ} \cdot 10^{\circ}$ ）のこと。
- (20) ibid. *Θαλα* 山脈（中心 $38^{\circ} \cdot 10^{\circ}$ ）のこと。
- (21) ibid. *Αροναλτης* 山（中心 $30^{\circ} \cdot 3^{\circ}$ ）のこと。
- (22) ibid. *Γαλαμαντες* 人の峡谷（ $50^{\circ} \cdot 10^{\circ}$ ）のことか。
- (23) 以下 3 つはいずれも不明。位置的には上 2 つは Ptolem. IV 卷 6 章 3 節、*Μανόρον* 山脈（中心 $14^{\circ} \cdot 19^{\circ}$ ）及び *Σαναπολα* 山脈（中心 $20^{\circ}20' \cdot 22^{\circ}$ ）の可能性も考えられる。

- (24) Ptolem.Ⅳ巻6章3節, *Ουνσαγαλα* 山脈 (中心 $33^{\circ} \cdot 20'30''$) のことか。
- (25) ibid. *Γιργιρι* 山脈 ($40^{\circ} \sim 45^{\circ} \cdot 21'$ を含む) のこと。
- (26) 以上, pp.38-42
- (27) Ptolem.Ⅳ巻1章1節, 外の海いわゆる西の大洋のこと。
- (28) 半円形の肩にかけるマントであり, 以下の, 衣服の丸い切り口を意味する quwāra, 意味不明の shābūra と共に海洋の形状を表すために用いられている。いずれもベルシア起源の語であるが, Maqbul Ahmad は, これらの語は本来衣服に関係する語であることを指摘すると共に, アラビア地図術におけるベルシアの影響を認めている (Kharita, E. I². II, p.577)。
- (29) A. Miquel はらっぱ? ともしている (*La géographie humaine du monde musulman jusqu'au milieu du 11^e siècle*, II, Paris, 1975, p.19)。
- (30) Ptolem.Ⅳ巻6章2節, *Νονιος* 川 (河口 $10^{\circ} \cdot 18'20''$) のこと。
- (31) ibid. *Χουσαρις* 川 (河口 $10^{\circ} \cdot 21'40''$) のこと。
- (32) 以上, p.66
- (33) アラビア海西部。
- (34) 本書によると, 経度 $72^{\circ}0'$ ・緯度 $4^{\circ}30'$ にある (p.5)。Ptolem.Ⅳ巻7章3節や, 案内記12節にある *Ἀρωματα* のことで, 村川氏は案内記のそれをソマリアの Guardafui 岬の西北側にある Olok に比定されているとする。(p.146)。
- (35) 本書によると, 経度 $72^{\circ}30'$ ・緯度 $2^{\circ}45'$ にある (p.5)。Ptolem.Ⅳ巻7章3節や案内記11節の *Ἀκανναι* のことで, 村川氏はこれをソマリアの Ras Alula ($50^{\circ}40'E$) 辺りかとする (p.145)。
- (36) 以上, p.74。Rafātā は註2を見よ。
- (37) Ptolem.Ⅳ巻8章, 内 *Αιθιοπια* のこと。
- (38) Ptolem.Ⅳ巻6章5節の *Γαραμαντες* 族のことと思われる。この部族は Herodotus (424 B.C. 没) の歴史 Ⅳ. 183や Plinius の博物誌 V. 36に既に記されており, 後者によれば, Phazania (Fezzan) 地方に居住し, Garama (現 Jarmah の西の廃址) を首邑とする部族で, Cornelius Balbus によって 20 B.C. 頃討伐されたとある。白いベルベル人や黒人などから成る (Negroid-Hamitic) 遊牧民で, その後もローマの度重なる討伐に耐え, 3世紀末からはトリポリタニアにしばしば略奪に赴き (J. Despois : Fazzan E.I². II, p.875), 一説では569年にビザンツと結び付くためにキリスト教を受け入れたとされている (Trimingham, History, p.15)。
- (39) H.v.Mzik は Damdam に比定する (Afrika, p.40)。al-Mas'udi に帰せられる地歴書 K. Akhbār az-Zamān 『時代の情報』以下では, Damdam は食人種を指す。Kubbel と Matveev はアフリカ奥地のナイル水源とされる地域を指すという説を紹介している (Arab. istochniki, p.357)。
- (40) Ptolem.Ⅳ巻6章, 内 *Αιβυνη* のこと。
- (41) 以上, pp.101-102
- (42) Ptolem.Ⅳ巻6章2・3節, *Μασιθολος* 川 (河口 $14^{\circ} \cdot 6'40''$) のことか。
- (43) アラビア語で黒い人達を意味し, 多くの場合, サハラ以南に広がるサーヘル地域の黒人を指す。145A.H./762年, アラビアの聖都メディナでスーダン人が反乱を起こしたという記録もあり (aṭ-Tabari, *Ta'rikh*, ed. de Goeje, III/1, p.265, Leiden, 1964), スーダンという語が8世紀のイスラーム教徒による北アフリカ征服後, ベルベル人がアラビア語へ移り変わり始めた頃に用いられるようになったとする説 (B. Davidson, *The Growth of African Civilisation*, London, 1965) もうなづける。
- (44) スビア南部にあったキリスト教国 Alodia。
- (45) Fezzan 地方。註7を見よ。
- (46) ナイルに関して Ptolem.Ⅳ巻7章7節には, $57^{\circ} \cdot 6's$ の湖と $65^{\circ} \cdot 7's$ の湖から流れ出る川が $60^{\circ} \cdot 2'$ で合流してナイルになるとあり, 第3の小さい湖は記されていない。以上, pp.106-107。Āliha 山は註14を見よ。
- (47) Ptolem.Ⅳ巻6章2・3節, *Δαρας* 川 (河口 $10^{\circ} \cdot 15'$), 現モロッコ南部を横断する Wadi Dar'a に比定されることが多い。
- (48) 以下2つは共に不明。
- (49) Ptolem.Ⅳ巻6章3節, *Βαγρασας* 川のことか。
- (50) Ptolem.Ⅳ巻6章4節, *Νιγρις* 川のことか。
- (51) 不明。
- (52) Ghāna の山が本文86頁にある下 Gharamas 山で, Ptolemaeus の *Γαραμαντες* 人の峡谷を指すならば, この川は Ptolem.Ⅳ巻

6章4節にある Γειρ 川とも考えうる。

- 53) Ptolem.Ⅳ巻6章12節, Γαρμυ 首邑 (43°・21°30′) のことか。註38を見よ。
- 54) Ptolem.Ⅳ巻6章4節, Χελωνιτιδες 湖沼 (中心 49°・20′) のこと。
- 55) 以上, pp.110—111. Qāfas 山, Thālā 山, Thamundāqanā の町, Sarghātūs の山, Nighīrā の町は, 註19, 20, 8, 24, 9を見よ。
- 56) Ptolem.Ⅳ巻6章2節, 'Οφιωσση 川 (河口 10°・20′) のこと。
- 57) ibid. Σαλαθοο (河口 9°40′・22′) のこと。
- 58) Ptolem.Ⅳ巻6章2・3節, Σουβοο 川 (河口 9°・25′ モロッコ南西部を流れる Wadi Sous に比定もされる) のことか。
- 59) Ptolem.Ⅳ巻6章3節, Σαγαπολα 山脈 (中心 20°20′・22′) のことか。
- 60) ibid. Κινυφ 川の第1支流 (水源 40°・21′) のことか。
- 61) Κινυφ 川の第1支流と合流する第2支流 (水源 45°・21′) のことか。
- 62) 不明。
- 63) Ptolem.Ⅳ巻6章4節, Νουβα 湖 (50°・15′) のこと。
- 64) 以上, pp.115—116. Nāwīyūs 川, khūsayrus 川, Jirjiris 山は註30, 31, 25を見よ。

III

- (1) 彼の代表作「情報の泉 ('Uyūn al-'akhbār)」については、次回に扱う。
- (2) 他にカイロ版 (1935) があり、部分訳だが、W.O.Sproull, *An extract from Ibn Kutaiba's Adab al-Katib*, Leipzig 1877もある。
- (3) laṭa' については、十四世紀に編纂された Ibn al-Manẓūr の大辞典「アラブの舌 (Lisān al-'arab)」にも同じ記述が見られる。
また、Kazimirski, *Dictionnaire Arabe-Français* には laṭa' の意味として(1)(黒人に見られる)唇内壁部の白い斑点、(2)(老化などにより)歯が抜けること、(3)唇または陰唇が貧弱なこと、とある。ここでは多分ヘルペス (Herpes) の一種と思われる。
- (4) 現在でもアフリカ諸民族には、特に小児の頃、臍ヘルニア (出臍) を持つものが多い。アフリカには出臍の彫像が多く (例えば, F. Willett, *African Art*, 1985. 中のもの参照), 臍が強調されたものと説明されているが、これはむしろ写実的な表現と思われる。元来、アラブ世界においても、臍は隠喩として中心にあるもの (例えば、自分たちの住む世界の中心という意味で、聖地メッカのカーバ神殿を支える「天の臍」と称する柱) を表しており、その部分の肉体的異常は、逆に “dhakara 'ujara-hu wa bujara-hu 「彼は自分の明らかな欠点も隠れた欠点 (=bujar 複数形) も述べた。」”, “'ayyara bujayr bujara-hu nasiya bu-jayr khabara-hu 「小さな出臍が自分のことは忘れて、他の出臍の悪口を言った(諺)」” という定型表現に見られるように、「秘密にすべき欠点」として負の隠喩になる。また因みに、アフリカ史において重要な都市「トンプクツ」は、語源が明らかでないが、「大きな臍の女」を意味している (H. Miner 「未開都市トンプクツ (*The primitive city of Timbuctoo*)」赤阪賢訳、弘文堂、p.295. 注(2)参照)。
- (5) 以上, p.148

IV

- (1) 全訳に'Абд ар-Рахман ибн 'Абд ал-Хакам ЗАВОЕВАНИЕ ЕГИПТА, АЛ-МАГРИБА И АЛ-АНДАЛУСА. がある。
また関連部分では部分訳だが, Torrey, *The Mohammedan Conquest of Egypt and North Africa, Biblical and Semitic Studies* (Yale Bicentennial Publications), New York 1901, pp.279—330. : A.Gateau, *Conquête de l'Afrique du Nord de l'Espagne*, Algiers 1947. : H.Masse, *Le Livre de la Conquête de l'Égypte, du Magreb et de l'Espagne*, Le Caire 1914. がある。
- (2) カナーンとノア、ハムの関係についてのアラブ世界の伝承には、カナーンがハムの子とするもの、セムの子とするもの、クシュの子とするもの、ノアの四番目の子とするものの四種類がある (B. Joel, Kan'an El² IV p.528.参照)。コーランは明示していないが、最後の伝承に属する (コーラン11章44—46参照)。
- (3) 聖書によれば、この「ハムの呪い」は、ハムのノアに対する不孝のためと解されるが、その対象はやはりハムの第四子カナーンである。しかし、聖書には、「カナーンはそのしもべとなれ」とあるのみで、呪いの結果として黒人になったとはない。聖書の記述は、呪いの理由が何であれ (cf. タルムード (Sanh.70 a 等) 以後のラビの説明の多くは、去勢と近親相姦の罪に帰している。例えば, L.Poliakov 『アーリア神話』(アーリア主義研究会訳、法政大学出版局 1985, p.464, 注 (15) に引用されたシラの注釈: R.Graves & R.Patai, *Hebrew Myths*, 1964, p.121. の伝説を参照。プロテスタント流の注釈については、Don

- C.Allen, *The legend of Noah*, Urbana 1949. Ⅲ pp.77~78. を参照), 現実の地政学的要請から, イラエル人がカナーン人の制圧を正当化するため, 神話上の操作を行なったものと考えられる。このような自らの民族の系譜的操作は, 一種の「自然発生的な人類学」(Poliakov *ibid.* p. 5.) であり, 人類史上枚挙にいとまがない。単純に言えば, 奴隷としてのカナーン (つまりハムの子孫たち) から, 奴隷としての (ハムの子孫) 黒人への変形は, すでに聖書の世界観に内包されていたのであり, この論理はハムは農奴の祖先, セムは聖職者の祖先, ヤベテは貴族の祖先という中世ヨーロッパの階級観を伏流として, 現代まで続くのである。アラブ・イスラム世界の黒人観にも当然影響を及ぼしており, 例えば, あるアラビア語福音書外典中の「ユダヤの子らは人々の中で黒人と同じランクに属する」というイエスの言葉は意味深長である (F.Lovsky, *L'antisémitisme chrétien*, Paris 1970, p.351. 参照)。なおハムと黒人観の歴史については, E.R.Sander, The Hamitic hypothesis, JAH 10, 1969, pp.521~32. 参照。
- (4) 創世記では「ミツライム (Miṣrayim)」。語源は不明。H.T.Norris, *Saharan Myth and Saga*, Oxford 1972, p.64の注2) 参照。
- (5) この部分は前の記述と矛盾するが, 彼の記述態度として, このように異なる伝承経路による記事が併存することが多い。以上, p. 8
- (6) 第二代エジプト総督で, 在職25~35 (A.H.)。
- (7) 'asawīd は 'aswad の複数形であるが, ここではヌビア人を指す言葉として使われている。
- (8) Yahyā b. 'Abd 'Allāh b. Bukayr al-Makḥḥūmi (154/770~71または155/771~72~231/845~46)。651~52年のこの遠征の直接の参加者。マリーキー派の法学, ハディース, 歴史に通じた有名なエジプト人。
- (9) 以上 p.188
- (10) 生没年?~683年, エジプトの征服者 'Amr b. 'Ās の甥で, イフリーキーヤ総督。663~670年にかけて, リビアからチュニジアを征服後, 670年には, 軍営都市カイラワーンを建設した。以下の記事は46/666~7年に行なわれたとされる, フェザーンとカワールへの遠征についてのものである。また, 彼は680年にマグリブの端 (al-maghrib al-'aṣqā) に長征し, 大西洋に達した。帰途, ビスクラ付近でのベルベル人との戦いで戦死した。ここでのハカムの記事には幾分伝説化された部分があるが, ウクバがかなり内陸部の砂漠まで入ったのは事実のようである (N.Levtzion, *The Sahara and the Sudan from the Arab conquest of the Maghrib to the rise of the Almoravids*, CHA vol 2, p.638. 参照)。この遠征は今日でも西アフリカに「ウクバ伝説」として跡を残しており, フルベ族やアラブ化されたクンタ (Kunta) 族のようにウクバを自分たちの民族の始祖とする伝承がみられる (小川 了「セネガル土着のイスラム教団と牧畜民」『イスラム世界の人びと-3 牧畜民』東洋経済新報社 1984, pp.238~9. ; 江口一久「フルベ族の歴史」『民族の世界史12 黒人アフリカの歴史世界』(川田順造編) 山川出版社 1987, pp.339~40. ; Levtzion, *ibid.* p.637 参照)。
- (11) 現在のリビア南西地方。古代では Phasania とある。住民の大部分はアラビア語マグリブ方言を話し, 黒人とかなりの混血がみられる。アラブ遊牧民もいるが, かなり異なる方言を話す。他には, ベルベル語を話す Ajjer 族 (トゥアレグ), スーダン系言語を話す Tebou 族 (極少数) がいる。住民は全てマリーキー派である (J.Despois, Fazzān, EI² II pp.875~7. 参照)。リビアのトリポリから, Jabal Nafūsa, フェザーン, カワールを通過して, チャド方面に至る道は, ローマ・カルタゴ時代 (或いはもっと早く) から重要な交易路として使われており (R.C.Law, *The Garamantes and trans-Saharan enterprise in classical times*, JAH VIII 1967, pp.181~200. 参照), その状況はアラブ・イスラム時代になっても変わらなかった (B.G.Martin, Kanem, Bornu, and the Fezzan: Notes on the political history of a trade route, JAH X 1969, pp.15~27. 参照)。ウクバの通ったルートはこの道である。また, 彼以前にも少なくとも七世紀後半までには, Mu'āwiya b. Ḥudayj 等によるフェザーンへの進入がなされていたと思われる (M.Brett, *ibid.* p.506 参照)。
- (12) ヤークートの『地名辞典』には「フェザーン南部のカワール地方最大の町」とあるが, カワールの転化か, 誤写の可能性の方が高い。
- (13) Torrey のテキストには kūwār とある。kuwār, kawwār, akawwār と書かれる。サハラ南部, 現在のニジェールにある一群のオアシスで, 東に Tibesti 山地, 西に Aïr があり, フェザーンからチャドへ至るルートの中間地点。住民はカスリ, Teda, トゥアレグ系の人々である。塩を産することによって有名である (R.Mauny, Kawār, EI² IV p.777. 参照)。
- (14) この記述は, この前に出てくる Waddān でのウクバの行動 (イスラム教徒との以前の約束を破ったことで Waddān を攻撃し, その王の耳を切り, 三百六十人の奴隷を課した), さらに, ヌビア遠征での 'Abd 'Allāh の行動 (やはり以前の約束を反古にしたことで, 三百六十人の奴隷と, 食料物資の交換としての四十人の奴隷, 計四百人の奴隷を課した) 等の記述と類似している。古代オリエント以来の奴隷制はイスラム時代にも持続したわけだが (藤本勝次「中世イスラム世界における奴隷

貿易』『史泉』第30号, 1964, pp.66-76.参照), イスラム法の規定では, 異教徒の戦争捕虜か女奴隷の子供に限られ, 債務奴隷は禁止された。従って, アラブ人であれ, アラブ以外の民族であれ, 同じイスラム教徒を奴隷にできないので, 奴隷の需要が増すと, 当然その供給源を異教徒に求めなければならなかった。しかし, 異教徒でも協定を結んだ(つまり武力'anwāではなく和約 ṣulḥ による征服)場合は, イスラム教徒に保護されることになっていた。以上のことを考慮すると, 初期の和約による平和裏のアラブの征服活動(実際にはそうでなかった可能性の方が高い。森本公誠『初期イスラム時代エジプト税制史の研究』岩波書店, 1975, pp.3-22.参照)と, 増大する奴隷需要に応じた当該の異教徒からの奴隷獲得の現状とを法的に整合化する手段として, 一連の記述において和約違反に対する懲罰という形が作り出されたのではないだろうか(M.Brett, *ibid.* p.506.参照)。

- (15) 1857年ドイツ人旅行家 H.Barth が実際に同地を訪れており, 現在のリビアとニジェール共和国の境にある Tummo 山地のちょうど北に位置している。この奇跡物語は, 後期のいくつかの文献では, ウクバのスース遠征に結びつけられている。

多くの民族の習俗において, 名馬と水辺は関連が深い。水中から竜馬が現れ, 牧馬と交って, 駿馬を生むという数多くの名馬伝説(石田英一郎『天馬の道』『桃太郎の母』(講談社学術文庫)所収・南方熊楠『十二支考』(東洋文庫)の馬の部分参照), アラビアン・ナイトに見られる海馬の話もこの類いである(『アラビアン・ナイト12』前嶋信次訳, p.19.(東洋文庫)参照。馬と泉については, 詩人の霊泉として知られる, ボイオティア地方のヘリコン山にあるヒッポクレネー(Hippokrene: 馬の泉)が有名である。これは, ギリシャ神話のペーガソス(Pegasus: 古代ギリシャ人は, page<水源>とこの語を結びつけた)が踏で大地を蹴って湧出させた名泉の一つである。ペーガソスはコリントスの聖泉ペイレネーの番をする巫女ペガタたちにちなんで名づけられたとする伝承があり, これはエジプトに起源を持つと考えられる。アビュドス(B.C.2000年頃存在したエジプト中部の町)にあるオシリスの最古の神殿は, ペガと呼ばれる聖泉がその中心となっている(W.Budge, *Dwellers on the Nile*, 1885 (rpt. New York, 1977) p.276.参照)。その他の馬と泉に関する話は, 『十二支考』p.107.参照。また, 馬はその肉体的能力, 怜悯な判断力等に基づく隠喻から人智を越えた能力があると考えられ(例えば, ケルト, ゲルマンの白馬による神意についての馬占い), また, 時にはこの世(地上)とあの世(天界, 死者の国)をつなぐ乗り物(例えば, ギリシャのヘリオス, インダのスーリヤ(Suriya)の太陽神が乗る車を引く馬, 天馬ペーガソス, アジア各地に見られる葬礼競馬)として, 不死性の象徴と考えられていた。ここでの「馬の水」の物語は, 「馬」と「水」と「不死」に関する伝承と民俗的隠喻が重なりあっている。なお, ここでのウクバの遠征の記事全体とアレクサンダー伝説との間の類似性についての議論は, Norris *ibid.* p.33.を参照。

- (16) 内容は派によって少し異なるが, 礼拝の一単位のこと。詳しくは『イスラム事典』平凡社 p.405.参照。

- (17) 現在のフェザーン地方の中心都市で, 史上, アフリカ中央部からの黒人奴隷貿易の拠点として名高く(例えばカイロにあった「ザウィーラ門(bāb zawīla または zuwayla)」), イスラム世界各地から商人が集まっていた(A.Grohmann, *Zawila*, *El VIII* p.1219.参照)。八世紀中頃までにはイバード派の中心となっていたらしい(B.G.Martin, *ibid.* pp.10-18.参照)。

- (18) 以上, pp.195-96

- (19) 'Ubayd 'Allāh b. al-Ḥabḥāb. ウマイヤ朝10代カリフ Hishām のイフリーキーヤ総督(在職116/734-123/740年)。

- (20) 前述の 'Uqba b. Nāfi' の息子で, 北アフリカとスペインで戦ったアラブ人の将軍。123/741年に戦死。以下の記事は, 116/734年に行なわれた西スーダンへの遠征(多分, 奥地までではなく, 境までしか行っていない)についてのものである(Lévi-Provençal, *Un nouveau récit de la conquête de l'Afrique de Nord par les Arabes*, *Arabica* I 1954, pp.17-43. : S.Trimmingham, *History*, pp.16ff. : H.T.Norris, *The Arab Conquest of the Western Sahara*, London 1986, pp.135ff.参照)。

- (21) as-Sūs al-'Aqsā と呼ばれ, 現在のモロッコ南部の三角形の平地帯で, Wādī Sūs が流れる。117/735年に Ḥabīb b. 'Abī 'Ubayda によって制圧され, イスラムを受け入れる(T.Lewicki, *Les origines de l'Islam dans les tribus berbères du Sahara occidental* : Musa Ibn Nusayr et 'Ubayd Allāh Ibn al-Ḥabḥāb, *Studia Islamica* 32 1970, pp.203-214.参照)。

- (22) アル・バラズリーの『諸国征服史』には tarājān とあり, Corpus (p.377) は, Sijilmāsa を中心に住む Tarja Sanhāja 族の可能性を述べているが, Norris (*ibid.*p.31) は, 否定的でベルベル族かどうかについても懐疑的である。Recueil (p.6) は, Jana (Ajāna) 或いは Zanāta 族の可能性を示唆しており, 語源としてベルベル語カビル方言 yiwen, ムザーブ方言 iggen, ジェルバ方言 ijjen (「一つ(であること)」)を挙げている。古典アラビア語の/j/は, 古代アラビア語の段階では [g] と発音されており(H.Blanc, *The fronting of the Semitic "g" and the qāl-gāl dialect split in Arabic*, *Proceedings of the International Conference on Semitic Studies*, Leiden 1969, pp.7-37.参照), ij(j)ān は [ig(g)ān] と推定される。ところで, イバード派の資料中に Jabal Nafūsa の ijnaw(un) [=ignawn 複数形 agnaw] と呼ばれる集団の存在が確認できる(Lewicki, *Études ibadites nord-africaines*, Warsaw 1955, pp.92-96.)。また, カネム語を話した同地のイマーム 'Abū 'Ubayd 'Abd al-Ḥamīd al-Jināwuni (または Janāwni)

(800-850?) の名前の jinawuni も語源的に同じと考えられ、これらの言葉は、ベルベル語でスーダーン人(黒人)を意味する genewa (>Guinea, ギニア) と関係付けられる。ハカムの ij(j)ān も同語源で、多分ベルベル語形の名の転写ではないかと思われる。因みに、ベルベル族自身は自分たちのことを imazighen (単数 amazigh<高貴な出の人, 自由人>の意)と呼んでいる。

「乳房が一つしかなかった」という記述からすぐにギリシャのアマゾン(通俗語源では、a・不定辞+mazos・乳二乳無し)伝説が連想されるが、実際、黒海沿岸地帯に加えて、リビア(古代ではエジプト以西の北アフリカ)もアマゾン族の支配地と考えられていたようで、ヘロドトスやディオドロス(特に彼は「リビアの好戦的な女性たち」と呼んだ)の記述に散見される(大林太良『神話の系譜』青土社、1986. の「女軍」pp.41-49.参照)。十四世紀頃までには、一部のアラブ人もマグリブの砂漠の奥地にアマゾン族が住むと考えていたらしい(Norris, ibid. p.32.参照)。アマゾン族はアレクサンダーとも関係するが、スペインで流布していたアレクサンダー伝説では(ただし、そこではアマゾンの支配地はイエメンになっている)、Jammaana (<ijjān?) という名が使われている(Norris, ibid. p.39.注(1): G.Gómez, *Un texto Árabe Occidental de la leyenda de Alejandro*, Madrid 1929, pp.67ff.参照)。このことは、ベルベル社会が特に古代において母権性社会であったこと、イスラムになってもその状態が続き、他の地域に比べて女性の権利が比較的自由に認められていたこと等と関連があるのかもしれない。或いは、ダホメーの女軍に代表されるような、より奥地のアフリカ部族の情報が誇張されたのかもしれない。

②3 以上 p.217

V

- (1) この他にペイルート版(1379 A.H./1960, 2 vols)がある。
- (2) 「ノアの呪い」の原因が明示されているが、旧約聖書 創世記 9章21-25節の記事と同根。本稿Ⅳ註3参照。
- (3) ここでは東海岸を指すと思われる。この海岸を意味する sahil の複数形 (sawāḥil) 即ちスワヒリが固有名詞的に用いられるようになるのはいつ頃か不明だが、例えば、Ibn Baṭṭūṭa (1377年没)の旅行記では Mombasa より南の海岸地帯が bilād (或は 'ard) as-Sawāḥil (サワーヒルの地)と呼ばれているようにとれる。
- (4) ゼンジュの語源はよくわからないが、「黒」を意味するベルシア語の kang 或は zang から来たとする説が有力である。そしてこのゼンジュ(或は Zinj)とは、アラビア語地理書では多くの場合、Maqdishū (10世紀に登場、現ソマリアの首都 Mogadiscio)を北の境とする海岸地帯に住む黒人を漠然と指す。
- (5) 以上, vol. I pp.12-13
- (6) バビロンで言葉の混乱が起こった時、セムの玄孫 Faligh b. 'Ābir が大地を分けた結果の話である。(vol. I p.17)。
- (7) アビシニア人を指すことが多いが、ここでは、ヌビア人、ベジャ人、ゼンジュ人も含み、アフリカ西部の黒人をスーダーン人と言うのに対し、東部の黒人をハバシャ人と言っているようだ。尤も前掲部ではクシュとカナーンの両子孫となっている。そして10世紀の al-Ṭabarī の世界史には、Wahb b. Munabbih (728年或は732年没)によるとして、クシュの子孫はハバシャ人、シンド人、インド人、カナーンの子孫は黒人、即ちヌビア人、フェッザーン人、ゼンジュ人、ザガーワ人、全スーダーン人種とある (*Ta'rikh* I/1, p.212, Leiden, 1964)。
- (8) 現スーダン北東部、ナイルと紅海の間に住み、アフロ・アジア語族北方 Cushitic を話す遊牧民。
- (9) ハバシャ(アビシニア)人とは異なるが、不明。ここではトリポリーチャド・ルートに従って、民族名や地名が東から西へ列挙されている(Corpus, p.377)ので、ザガーワより西となるのではなかろうか。al-Khabsh や、al-Ḥabas (?)との読みがある。
- (10) J. Marquart はハウサランド内に、Kubbel と Matveev は特に Katsina (現ナイジェリア中北部)に当たるとする(Die Benin-Sammlung, p. CVII, Arab istochniki, p.364)。
- (11) J. M. Cuoq は al-Marūwīyyān と読み、後述するこの al-Ya'qūbi の地理書『国々』に、Luwata 族(ベルベル系)の一支族として登場する Marawa と同一視する(Recueil, p.14)。
- (12) R.Mauny は現ニジェール中西部 Agades の南西にある水源 Marendet に比定している(Tablau, p.139)。
- (13) 以上, vol.I pp.216-17
- (14) インドの西端 Kathiwar 半島に当たることが多い。
- (15) 海に通じて接しているという意味。
- (16) 最も東にあるものという意味。

- (17) チャド湖北東岸。11世紀後半からは王国名として Zaghawa にとってわかる。
- (18) Marquart は Kākura と読み、Kanuri 語の koā kūrā 「偉大な人」と関係づけている（前掲書 p.LXXIX）。Ka-karah とも読まれている。
- (19) T. Lewicki は Ḥawṣīn (?) として、現代のハウサ人と一致の可能性を示す（Arabic External Sources p.23）。Ḥuḍīn, Hawḍh(i)n(?), Hawḍīn(?) とも読まれている。
- (20) 字面は Mali 帝国に先立つ Malinke 族の初期の族長国と同じだが、本文中の地理的位置や内容から見ると、異なるものであろう。Marquart はベルベル語の imellel 「白い」との関連も考えている（前掲書 p.XC II）。
- (21) Mai-Wasi, 即ち王 Wasi ではなかろうか。Mayusi とも読まれている。
- (22) 前述の al-H.b.s. と同じ（註9）か。Marquart は更に al-Khashina と読み替え、ハウサランドの Katsina に比定しようとする（前掲書 p.XC III）。
- (23) Thabīr と読まれることが多いが、Marquart に従えば、Katsina の町となる（同上）。
- (24) Marakḥ と読まれることが多いが、Marquart はハウサ語の mai-rākō 「指導者」としている（前掲書 p.XCIX）。
- (25) 前述の al-Marawiyyūn（註11）の複数語尾の取れたものではなかろうか。但し Cuoq は Merawa と読んでいる。
- (26) al-Ḥayā と読まれることが多いが、Marquart は Ta-kaddā と読み替えている（前掲書 p.CIX）。即ち、現ニジェール中部 Agades の北西にあった塩の町 Takaddā（現 Azelik ?）としている。
- (27) Murdana と読めるが、Kubbel と Matvvev は前述の Maranda（註12）とする（前掲書 p.374）。
- (28) al-Harbar と読まれることが多いが、Marquart は al-Hazbin と読み替え、Azbine 即ち現ニジェール中部の山岳地方としている（前掲書 p.CXVI）。
- (29) ベルベルの三大支族の一つとされる Sanhaja 族だが、ここでは、西サハラの広域の住む彼らのある集団。
- (30) Marquart は Tidhkarīn, Tighrarīn と読み、アルジェリアのサハラ砂漠にある Gyrar オアシスとしている（前掲書 pp.CXV II – CXV III）。なお、しばしば比定される Takrūr, 即ち、セネガル川下流の現 Fouta Toro にあった Tokolor 人の国とは異なる。
- (31) Marquart は az-Zanāfīn（即ちベルベルの Zanata 族）と読み替えている（前掲書 p.CXIX）。そのままでは az-Zayānīr と読める。
- (32) Marquart は Azwar（即ちモロッコ南西部、Wadi Dar'a の南にある山）と読んでいる（前掲書 p.CXX II）。
- (33) 不明。Baqrūt 他の読み方がある。
- (34) Trimmingham は Amghām 或は Anbāra の切れた形かもしれぬと言う（History, p.51）。前者は現マリの Tombouctou の西と思われ、後者はマリ中南部の Hombori に比定されている。
- (35) Mauny は、現マリ南西部 Segou から 28km、ニジェール川左岸の Sama に比定する（Tablau p.126）。
- (36) 以上、vol. I pp.219–20。いわゆる「帝国」、ここでは Ghana, Gao (Kawkaw), Kanem (Zaghawa) の三つと、それらに隷属する複数の首長国或は王国という、西アフリカにおける政治組織の一パターンを伝えている（C.H.A. II p.667）。

VI

- (1) 他に、Ibn Coteibas *Handbuch der Geschichte*, ed. F. Wüstenfeld, Göttingen 1850 がある。
- (2) 七世紀の中頃イエメンに生まれ、サナー（San'a）に住み、110/728–9 または 114/732–3 年に没した。多くの著作を残したらしいが、殆ど現存しておらず、タバリー、マスウディー等の後世の文献に引用されたものだけである。ただし、後世の引用には出所の疑わしいものも多くが彼に帰せられる傾向があり、注意を要する（Horovitz, Wahb b. Munabbih, El IV, p.1173–75 参照）。もし、ここの記事が正しく彼に帰せられるとすれば、アラビア語文献で最初のまとまったアフリカ民族（特にザガーワ）の記述となる。
- (3) この記述の前にクタイバは「ハムの呪い」の原因となった出来事について述べているが、聖書の記述と幾分異なる。特に「カナン之父（＝ハム）は呪われよ。その二人の兄弟（＝セムとヤベテ）の奴隷となり仕えよ」というノアの言葉は、呪いの直接の対象をハムと述べており、聖書と相違する。G.Lecomte（*Les citations de l'Ancien et du Nouveau Testament dans l'oeuvre d'Ibn Qutayba*, Arabica 1958, pp.34–46.）によれば、クタイバの全著作中、聖書からの引用は、ムナツィフからのものが最も多いのだが（明示されていない部分も含めて）、中にはユダヤ系学者、現存しないアラビア語訳聖書（或いは外典、偽典を含む注釈書）、シリア語訳（或いはアラム語）聖書等からの引用がみられる。彼はギリシャ語聖書からの直接の引用については否定的である。また、イスラムの正統伝承を支持するために、当時イスラム世界で流布していたものの方を積極的に選択した

- ようである。ここでの記述は、ヤークービーやハカムのものに比べると、「呪われたハム＝黒人」の構図がはっきりしている。
- (4) Arab. istochniki (p.21) は qarān と読み、カイロ版 (p.26) は q[a]zzān とし、異本の gh[a]zān を挙げている。Corpus (p.15) は qazān と読み、タバリーに見られる同様のリストからさらに fazzān (フェザーン) とすべきであるとする。AHA (p.12) は quran (qoran) と読み、実際には /goran/ と発音されだものの転写であるとし、後世のレオ・アフリカヌスの記述から、Daza の Tebu 族南部を指すとする。Recueil (p.1) も同意見であるが、qar'an と読んだほうがよいとしている。古典アラビア語の /q/ は、現代方言では [g], [gh], [ʔ] 等となっているが、古代アラビア語では /k/, /g(=j)/ の強調音化 (emphatics = pharyngeal lization or glottalization?) された対立音素として機能し、異音に [G] を有していたと推定される (H.Blanc, *ibid.*, M.Rodinson, *Sur la prononciation du qāf arabe*, D.Cohen ed., *Melanges Marcel Cohen*, The Hague 1970, pp.298-319.参照)。
- (5) 以上, p.26
- (6) Ṣayf b. Dhī Yazan. ヒムヤル王家の王子で、サーサーン朝ペルシアの援護によってイエメンをエチオピア支配から解放した。以後、ペルシア皇帝により彼の他の王に叙せられた。570年頃と考えられる彼のエチオピア人に対する勝利の物語は、イスラム時代に入ってから語り伝えられ、『サイフ・ブン・ズイー・ヤザン物語 (Sirat Ṣayf b. Dhī Yazan)』という一群の英雄物語を生み出した。「異教徒エチオピア人 (=黒人)」に対する勝利というテーマは、特に初期のイスラム教徒による征服活動の時代においては、異教徒に対する勝利の象徴という意味もあったために、アラブ世界全体に流布した。実際、十五世紀のカイロでまとめられたものによる現在の流布本では、イエメン対エチオピアというよりも、イスラム教徒サイフ対異教徒 (黒人) という構図がクローズアップされており、アラブ世界の民衆レベルの「黒人観」を知る重要な資料である。また、同物語には、民衆のイスラムの姿が生き生きと描かれており、その分野の重要な資料でもある (R.Paret, Ṣayf b. Dhī Yazan, *El VII* pp.71-73.; K.Petráček, *Volkstümliche Literatur*, H.Gätje ed. *Grundriss der arabischen Philologie*, Wiesbaden 1987, pp.228-41.参照)。
- (7) ホスロー一世 (在位531-579年) のこと。サーサーン朝ペルシア最大の王とされる。
- (8) ユダヤ教に改宗した最後のヒムヤル王ズー・ヌワース (Dhū Nuwās: 在位487-525年) によるナジュラーンのキリスト教徒虐殺に対して、ビザンツ皇帝の要請を受けたアクスム王国は、イエメンに出兵し、ズー・ヌワースを殺し、その後、イエメンを支配した。この支配に対して、象の年 (570年) の数年後、ヒムヤル王家のサイフがサーサーン朝の軍事援助のもとに彼らも解放した史実を指す。
- (9) ダイラムはカスピ海南西岸の山岳地帯の古名で、その住民は峻険な地所のため閉鎖的社会を形成し、アラブ征服後も、容易にイスラム化しなかった。言語はペルシア語の一分派である。九世紀後半よりサイド派の布教によりシーア派に改宗するものが増加し、イスラム化された。サーサーン朝時代から忍耐強い強健な兵士として有名で、各地で傭兵として使われ、トルコ人と並び称される。
- (10) ここでは、スーダーン人がハバシャつまりエチオピア人を指している。本来、アクスム王国も同じ南アラビア語系のセム語を話す南アラビアからの移住者が創った国であり、エチオピア側からイエメンに対する態度は、ソロモンとシバの女王の子供をその始祖とする伝説にも見られるように望郷的なものに対して (E.Ullendorf, *The Ethiopians*, Oxford 1973³, pp.62-68.参照), イエメン側からのものは、イスラム教対キリスト教 (ペルシア対ローマ [=キリスト教] も含めて) という対立の構図もあって、複雑である。ただし、ゲーズ語起源のアラビア語の量 (E. Ullendorf, *ibid.*, p.48.; Th. Nöideke, *Lehnwörter in und aus dem Athiopischen, Neue Beiträge zur semitischen Sprachwissenschaft*, Strassburg 1910, pp.31-66.参照) や、ムハンマドの教友たちの一部がメッカからエチオピアへ避難したという伝承等から判断すると、両者間で人や物資の往来はかなり盛んであったようで、アラブ世界が得たアフリカ情報の一つの重要なルートであると言える。
- (11) 以上, p.664